令和　６年　３月２１日

行 政 視 察 報 告 書

委員会名（会派名）	新風つばめ	報告者	高橋妙子・小林秋光
視察日程	令和　6　年　2　月　28　日 ～　2　月　　29 日		
調 査 事 項 及び 視　察　地	①　東日本大震災・原子力災害からこれからの防災に学ぶ		
	②　サッカー場整備に係る先進地視察		
	③　野口英世記念館		
参加議員（委員）	小林由明・岡山秀義・斎藤信行・小林秋光・大島靖浩・斎藤和也・稲村隆行・高橋妙子		

①

【調査目的・内容】

東日本大震災・原子力災害伝承館の訪問で学んだことを、燕市の防災・減災に役立てていくことを目的とする。

【所感】

津波被害の激しかった双葉町沿岸部の中野地区に作られた伝承館を訪問した。

原子力災害を中心とした展示や語り部講話を通じて、震災の記録と記憶を教訓として防災、減災に役立てるため、福島第一原子力発電所の建設、東日本大震災と事故の発生、応急対応、住民避難や復興過程、廃炉と福島イノベーション・コースト構想のコーナーが作られている。

震災前、震災当時、震災直後の状況を時系列で辿りながら、逆境を乗り越え、復興へ向けて挑戦していく福島県の姿を発信している。

「大規模災害発生時の避難及びペット問題」は今や社会的問題であり、燕市においても大きな課題となっている。

今回、語り部講話を聞く機会もあり、その中でペット問題に関しての話もお聞きした。

人命救助が最優先される中で、家族の一員として共に暮らしてきたペットをどのように守るか。

人それぞれ倫理観が違う中でも、こうした問題は防災訓練や防災教育を進めていく上で、議論されるべき課題なのではないかと考える。

東日本大震災において、多くの尊い命と当たり前の日常を一瞬にして奪い去られ、絶望と悲しみの中、未来が見えない日々を過ごすということは、未曾有の災害を経験したことがなければ完全には理解できないのかもしれない。

しかし、他人事を自分事として捉え、今回訪問した伝承館の展示物や語り部講話を見て、聴いて、当時の記録をこれからの教訓しとして防災に役立てていくことは、私たちにとって必要なのだと考える。

東日本大震災を忘れられない多くの人がいる。

辛く苦しい記憶を忘れられない多くの人がいる。

私たちはその記憶を記録として辿り、そしてその経験を活かしていかなければならない。

防災の観点だけではなく、市民の命を守り抜くことが、本来の使命だということも忘れてはならないのだ。

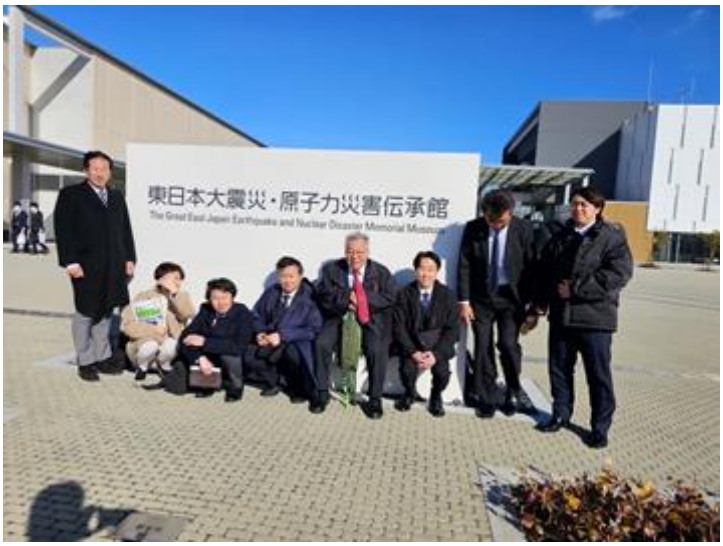
令和　６年　３月２１日

②	**【調査目的・内容】** サッカー場、スポーツ施設の設計や運営を学び、燕市のスポーツの在り方の参考にする。 **【概要】** Ｊビレッジは1997年に日本初のナショナルトレーニングセンターとして設立され、福島県双葉郡楢葉町に位置している。施設は12面のサッカーグラウンド、5,000人収容可能なスタジアム、体育館、プール、レストラン、会議室、ホテルなどを備え、震災後は復興の象徴として地域のスポーツ振興に貢献している。 **【視察内容】** 今回の視察において、Ｊビレッジへの質問に対する回答をいただき、また現地では施設内を2名のスタッフの説明を受けながら見学。全天候型サッカー場、人工芝、天然芝の管理や特性、利用状況等について各自質問した。 全天候型サッカー場については、メリットとして天候に左右されず通年利用可能のため利用率が高い。デメリットは建設コストが高額であること。 人工芝については、メリットとしてメンテナンスの手間が少ない。デメリットは降雪時の利用制限や10年ごとの張替費用が必要であること。 天然芝については、メリットとして、選手のパフォーマンス向上や環境にやさしい特性がある。デメリットは管理コストが高く、怪我のリスクがある。 **【所感】** 燕市でのスポーツ施設の整備や改善に取り組む際には、施設の利用促進や地域スポーツ振興に向けて、今後も情報収集や研究を重ねていく。
③	**【調査目的・内容】** 日本初の私立医学校を創設した長谷川泰は長善館で学び、維新後は長崎医学校校長などを経て済生学舎（現在の日本医科大学）を創立した。野口英世先生もそこで学び育った医師である。長善館と野口英世先生との深い縁や、長善館の教えが後の野口英世先生の人生、業績にどのような影響を与えたかを学び、今後の長善館の取り組みや教えに活かしていくことを目的とする。 **【所感】** 一歳半の時に、左手に大やけどを負った野口英世先生は、恩師・友人・家族の励ましと援助を受けその苦難を克服した。左手の手術により医学のすばらしさを実感し、自らも医学の道を志した。 記念館は平成27年にリニューアルされ、年間20万人が訪れるようになり、母であるシカさんの手紙や野口英世先生の意思と想いが刻まれた旧家柱などが展示されている。 シカさんの子を想う母の気持ちが書かれた手紙はどんなに月日が経っても色褪せることなく、親子の深い絆としてこれからも人々に感動を与え、夢を追い目標に突き進む者たちへの大きな道標となるであろう。 長善館においても、子どもたちが、描いた夢を諦めることなく、真っ直ぐに人生を切り開いていく強さと優しさを学べる場所であり続けてほしいと思った。 今後の長善館の取り組みや、燕市における教育において、野口英世記念館で学んだことを活かしていきたい。

令和　６年　３月２１日

【視察の様子】

①東日本大震災・原子力災害伝承館



②J ビレッジインターナショナルトレーニングセンター

③野口英世記念館